

# 家庭訪問を終えて



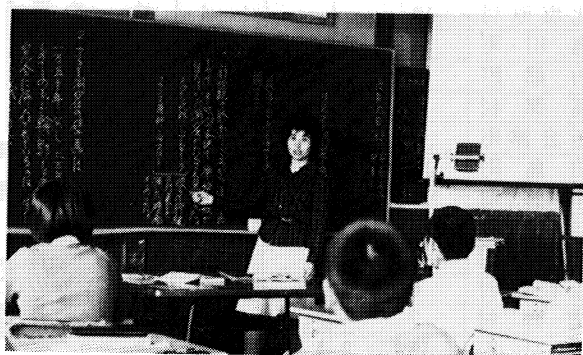
氏 家 瑞 江

Y男の家は、温泉街を抜け、開拓地に入ってから、しばらく車を走らせた所にやっとあった。初めての私には方角の見当もつきかねる所だ。ほかに人らしいものはまるで見当たらない。折しも、降りはじめた霧雨にけむって道々の眺めは茫漠としている。

家の近くで車を降りると、瞬時に、Y男の家だとうなずける。家業の養豚のにおいと豚舎から流れる汚水と、折からの小雨とでぬかる足もとを気にしながら、玄関口とおぼしき所で声をかける。返事もなし、人の気配もない。豚舎の入り口で大声をあげる。声が届いたとみえて、しばらくしてから、おじいさんが見えられた。彼の保護者である。(昨年まで、彼は、この祖父と二人で学校よりも手伝う方が主なような生活

を送っていた。)用向きを話すと、ていねいな態度で聞いてくれた。「あまり、休みや早退が多いので、彼は学校で、正常な生活や活動ができないでいる。これでは持つている力を伸ばす前に、劣等感ばかり育ててしまい、彼をだめにしてしまうだろうから、学校にだけはきちんとよこしてもらえまいか。」  
「わかった」という。  
後日、二度ほど、「家でつくったものだから」と言って椎茸を届けてくれた。二年生になってから、彼は、ほとんど休むことがなくなった。  
K男の家では、おばあさんが出迎えてくれた。話によると、K男が三つの時に、母と生別しているという。以来彼と兄の二人兄弟は、その祖母を母のようにして、父と祖父との五人で暮ら

してきたという。その祖父が、一年ほど前に患い初め、入院を続けている。病が重くて、おばあさんは病人から離れることができなくなってしまった。家との行き来を考えて、近くの病院に転院させてはみたが、それでも、帰って子供たちの世話をするなど、思いもよらなくなってしまったという。  
今までは、一番気がかりだったK男が、おばあさんの朝と昼の食事を弁当にして、毎朝、必ず届けるのだそう。夕方は、学校の帰りに病院に寄り、空になった弁当箱を受け取ると、夕食を何か、また届けに来るといふ。「もう一年近くも毎日なんだぞい。」と話す。「学校の勉強は、きつとだめだと思うんだ



Y男もK男も元気に学習

けど、いっしょに暮らしていると、気性の一筋通ったところのある子でない。それがかわいいくつてない」と話すおばあさんの様子は、実に思いあふれるものが感じられるのであった。  
学校では常に静かで、存在さえも忘れられそうなK男の、私には全く知らない一面であった。

今、私の学級には三十四名の生徒がいる。ということは、私の学級の陰には、三十四の家庭があるということである。その家庭とは、実に多様であると思う。しかも、物心ついてからわずか十年足らずの中学生にとつて、この家庭の持つ意味は、はかり知れないものがあるであろう。うつ積した心をおちまけられる家庭を持つ子は、幸せだと思ふ。Y男は、そんな時、自分の心をどう処理するのだろうか。K男は、精神的にも、時間的にも、肉体的にも過重な現状を、どんな思いでこらえているのだろうか。そんな生徒の心に、満ち足りた何かを与えられるものが、もし学校の中にあるとすれば、それはいったい何だろう。心が練り上げられ、すがすがしく、雄々しい力をもし育てることができるとしたら、教科指導に勝るとも劣らない本当の教育ではないだろうか。ことは、とりわけ考えることの多かった家庭訪問であった。

(二本松市立岳下中学校教諭)